

## 第九章 様々な特急列車

イリ・ライナーがソシア領をかすめてウクライナー国内に入るとマリンポリンという要衝の駅に到着する。ユーロ高速鉄道網とシルクロード高速鉄道網が重なる駅ですべての特急が停車する。ホーム面は二十を超え、余りにも広いので毎日のように迷子だけでなく大人も保護される。ここからソシアはもちろんオスマンオトルコ、ペルシャキャッツなどかつての征服王朝の首都を結ぶ路線の中継点でもある。

イリ・ライナーの隣にはドラゴンの顔をした特急が入線する。中華民国の首都ペッキンに向かう超豪華列車だ。特殊なエンジンを積んでいてドラゴンのヒゲから蒸気が噴き出しながら時速四百キロを誇るスピードで走る戦車のような列車だ。その名をドラゴン・ライナーという。

ヒゲから発する水蒸気でイリ・ライナーを威嚇する。

「いやだわ。こんなところで意地悪するなんて」

もちろん固定式の窓なので問題はない。イリは反対側の特急列車に視線を移す。側面はまるで絨毯のようで非常にカラフルだ。

「あれはペルシャキャッツ王国の首都アラビアンに向う列車です」

乗降客が少ないのかドラゴン・ライナーが水煙を吐いて動き出す。

「失礼だわ。とっとと消え失せろ」

「イリ様。下品な言葉は慎まされ」

『『死ね』と言うよりはましでしょ』

長老が天を仰ぐ。先ほどまでいたドラゴン・ライナーがいたところにやはり白煙を上げる列車が入線してくる。

「なぜ水蒸気をあげる列車が多いの？」

「蒸気機関車のなごりでしょう。懐かしゅうございます」

「この特急はどここの国の列車？」

「オスマンオトルコです。サウナ・ライナーというこれも超豪華列車です」

イリはイリ・ライナーを貧弱に感じるが気にしない。背伸びなど無用だと再び確信する。

「どの辺が豪華なの」

「名前のとおり全車サウナ付きです」

「フーン。サウナより風呂の方がいいわ」

砂漠で育ったイリには風呂が最高の贅沢だった。

「単なるサウナではありません。あるサービスが……」

と言いかけて長老が黙る。

「どんな？」

「いえ、何でもありません」

長老の顔が赤くなる。その視線の先をイリがたどる。窓の向こう側でビキニ姿の若い女性が  
あるサービスをしている。

「爺やが若さを保っている理由が分かったわ」

「私はあんなサービスを受けたことはございません」

\*

次に入線してきた列車からは交響曲が聞こえてくる。

「爺や。あれは？」

「シンフォニー・ライナーです」

先頭車と後尾車と屋根がない中間車の三両編成のシンプルな構成だ。特急のように速く走る  
ことはない。駅に到着すると乗員が中間車両に移って交響曲を演奏して人々をなごませる。こ  
のシンフォニー・ライナーには数々のバージョンがあつて属する国も様々だ。それぞれ立派な  
名前を持っている。たとえばバッハ・ライナー。パイプオルガンを搭載している。アイネクラ  
イネ・ライナー。そしてビートル・ライナー。走行しながらロックを演奏する。

イリはすっかり虜になる。

「素晴らしいわ。旅をしながら音楽を楽しめるなんて」

「音楽だけではありませんぞ」

反対側の線路にモナリザの顔をデザインした特急列車が入線してくる。その車両数は三十以上で塗装はいかにも濃厚な芸術性をうかがわせる。

「ルーブル・ライナーです」

「乗ってみたい！」

イリがはしゃいだそのときイリ・ライナーが発車する。

「各ライナーはソシアにウクライナー侵攻を自重させるためにここマリンポリン駅に特急列車や特殊列車を向かわせましたが、ソシアはこのマリンポリン制圧に乗り出しました。ここはもう危険な場所です」

イリが我に返る。

「首都キープに急ぎましょう。美しい都市らしいわね」

「美しいというのはイリ様の誤解です。永遠の平和を断固としてキープするというウクライナー国民の心の支えである都市です」

イリは気を引き締める。人類がキープしなければならぬ本質がウクライナー共和国の首都に込められていると確信する。

青と黄色の特急列車がイリ・ライナーと擦れ違う。

「今のは？」

「ウク・ライナーです」

## 第九章 様々な特急列車

「戻りましょう」

長老が大きく首を振る。

「列車は簡単にUターンできません」

「何とかできないの」

「無理です」

「マリンポリンは危険だわ。何とか知らせなくては」

「だからウク・ライナーが向かっているのです」

「あつ、そうか。市民を避難させるためなのね」

長老は悲しそうに目を閉じて頷く。

## 第九章 様々な特急列車